

ほらの達人 秀吉・「中国大返し」考

服部, 英雄

<http://hdl.handle.net/2324/1516170>

出版情報 :
バージョン : accepted
権利関係 :



ほらの達人 秀吉・「中国大返し」考

Thoughts on “Chugoku Ogaeshi (Bicchu Ogaeshi)” of the Boaster Hideyoshi

服部英雄 (HATTORI Hideo)

目次

はじめに

- 1 本能寺の変の情報伝達
- 2 高松城から沼城を経て姫路へ
- 3 結論

キーワード

中国大返し 備中大返し 明智光秀 織田信孝 飛脚 書状 備中 高松城
備前 野殿 沼城 姫路城 山崎 山陽道

主たる論点

本能寺の変、明智光秀による主君織田信長・殺害事件の情報は、備中の戦陣にいた羽柴秀吉（のち豊臣秀吉）のもとに二日後に届いた。敵方毛利氏との停戦をとりまとめ、秀吉は光秀との決戦に臨むべく、山陽道（中国筋）を京都に向かった。いわゆる「中国大返し」、「備中大返し」である。

そのおり「二十七里を一日一夜」で駆けたと秀吉が書き残している。備中国高松城から決戦場となる山崎まで、九日間の行程、全距離 232 キロ（五十八里）の半分、中間点の姫路城まで「二十七里」を、秀吉はわずか一昼夜で駆け抜けたというのだが、およそありえないことだ。だが、秀吉のそのことばにより、「中国（備中）大返し」は神業に近いものだったとされてきた。秀吉によれば、六月六日未刻（午後 2 時前後）に備中高松城を出て、七日には姫路城に入ることができたという。しかしこの言葉は、のちになって、秀吉に敵対しはじめた織田信孝（信長三男）と周辺に対し、「大坂にて危機にあったと聞いた信孝様をお救いするために、秀吉が日夜懸命に馳せ参じたのです」、と秀吉が説明した文脈中のものである。真実というよりは誇張、なかば「ほら話」である。

秀吉本人が行軍中に記した六月五日秀吉書状（梅林寺文書）、つまりリアルタイム史料によれば、すでに秀吉は備中国・高松城を引き払っており、五日に安全地帯たる備前国・野殿（山陽道）まできていた。（毛利側の様子をうかがい

何事もなければ沼城まで行くと書いている。よって正しくは、秀吉本人は備中高松城を五日に出て備前国境を越え、七日の姫路入城までに、三日をかけた行軍であった。前提として道中の警護を担う先遣隊が、四日には備中を出て、同じく三日をかけて六日に姫路城に入城しており、やはりリアルタイム史料（六月八日杉若無心書状）に記述がある。六日に高松城を出発し、七日に姫路城に入城したというのは、リアルタイム史料の記述に矛盾しているし、物理的に不可能でもあるから、虚偽（ほら）と判断する。

—————・

はじめに

日本史上、最大のナゾである本能寺の変。めきめき台頭してくる羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）。だれしものが関心を持つ。事件の直後からさまざまな憶測がなされ、書物も多く著されてきた。我々歴史学に携わるものは、無数にある雑多な史料の中から、良質の史料のみを選んで、歴史の実像を復原していかねばならない。五〇年後、一〇〇年後、後世人による叙述は論外で、小説まがいの創作によって史実を組み立てることはできない。良質な史料は、リアルタイムないしそれに近い時間帯での書状か、日記である。しかしながら、たとえ当事者本人による記述であっても、すべてが事実とは限らない。相手を説得するための書状ならば、すべてを正直に書く必要はない。手紙による情報戦・宣伝戦があった。だれに宛て、何を意図していたものなのか、逐一吟味しなければならない。むろん秀吉は、情報戦の天才であった。本稿の分析では、「中国大返し」のうち、尋常ならざる行動・神業なるものは、秀吉の大言壮語、ほらであって、虚言・虚像であることを、リアルタイム史料によって明らかにする。

天正十年（一五八二）五月から、羽柴秀吉は備中高松城を攻めていた。堤防構築による水攻めが功を奏したようで、高松城は落城寸前であった。すでに和睦交渉が開始されており、秀吉勝利を明示するため城主清水宗治は切腹し、かわりに城内の兵は助命された。その陣中に、本能寺の変が秀吉に伝えられたが、決定通りに宗治は自刃し、秀吉は高松城代に杉原家次を置き、毛利方に後方を襲撃されることなく、明智光秀討伐に出発した。秀吉が天下人となるスタートであった。

以後山崎の合戦に到るまでを、後世人が「中国大返し」「備中大返し」とよんで、賞賛した（この言葉は当時の史料上の用語にはないようだ）。秀吉にはこの過程でいくつかの幸運があった。1、本能寺の変をわずか二日後に知ることが

できた。2、毛利氏との和睦がすでに調整済みであった。決裂・決戦にならなかった。3、明智光秀軍との決戦場・山崎へ、六月十三日に到着できた。本能寺の変からわずか十二日で引き返し、決戦に臨んだ。特に決定的なのは2の和睦が成立していたことで、直ちに折り返しうる条件が整っていた。秀吉以外の武将は何らかの制約があって、このような迅速な行動をとりえなかった。あまりにも好条件が整っているとして、さまざまな憶測が生まれている。しかしこの秀吉の行動はけっして神業ではない。決断は早く、行動は敏速で、いかにも秀吉らしい優れた行動であったが、決断さえすれば、ふつうの軍事行動の一環で、仰天するようなことでもなかった。それを神業であるかのように誇大表現したのは秀吉自身であり、それが子引き・孫引きされていった。

これまで六月六日午後に備中高松を出発して沼城に宿泊、翌日二十里を駆け抜け姫路に入城したという理解が定説だった。古く高柳光寿『本能寺の変・山崎の戦い』（一九五八・春秋社刊）をみると、「翌六日の午後四時頃、急に高松を発し、夜に入って備前の沼に到り、七日には大雨暴風を冒し、数カ所の大河、洪水を凌いで、姫路に帰った」と記している。新しくは谷口克広『検証本能寺の変』（二〇〇七・吉川弘文館・七八頁）も、「沼一姫路間を一日に駆け抜けたのがすごい。大雨の中、甲冑を着けての行軍である」として、礼賛している。秀吉の宣伝用の言葉を、後世の歴史家は、なべて事実であるかのごとく信じていたようである。

最近になって、以下に述べるリアルタイム史料、『梅林寺文書』中の秀吉書状に依拠する研究も現れた（渡邊大門/井沢元彦「秀吉軍団の健脚」『真説歴史の道』八号一〇頁（二〇一〇）、藤井讓治『織豊期主要人物居所集成』二〇一一）。しかしせつかくの着目にもかかわらず、前者の見出しには「一昼夜で70kmを踏破した秀吉軍」、本文には「昼夜にわたる強行軍」とあって、大返し神話の呪縛からまったく解放されていない。

以下は主として『大日本史料』第十一編一に掲載された諸史料に、近刊の『豊臣秀吉文書集』一（名古屋市博物館編、二〇一五）なども参照しつつ、「中国大返し」を再考し、伝説に覆われた秀吉の行動をさぐる。なお『大日本史料』第十一編は、秀吉が中国大返しのスタートを切る、まさしく天正十年六月四日から始まっている。昭和二年（一九二七）刊、いまから九〇年も前にすでに基本史料は網羅収集され、真相究明に必要な史料は大半収録済みであった。以下、（ ）内の頁数は『大日本史料』十一編一の頁である。

さて本稿では当時の通信・交通のありかたを前提に立論する。最初に本能寺の変に関わる情報伝達を明らかにしておく。

1 本能寺の変に関わる情報伝達

飛脚が高松に到着した時刻

本能寺の変は天正十年（一五八二）六月二日早朝で、『言経卿記』には

二日

卯刻前右府本能寺へ明智日向守依謀反押寄了、則時ニ前右府打死

とある。卯刻は朝の5時から7時までの時間帯をいう。

『公卿補任』には

六月二日辰刻前右大臣於本能寺有事

とある。辰は卯の一時（いっとき＝二時間）後、7時から9時である。

『兼見卿記』は「早天」とする。

この日はユリウス暦では六月二十一日に相当し、この直後に施行されることになるグレゴリウス暦では七月一日に相当する。ほとんど夏至に近かった。西暦6月21日ならば、京都市の日の出は4時46分である。『(興福寺)蓮成院記録』に「未明に四方ヲ取廻押寄」とあるように、夜のうちに光秀勢が取り囲み、白みだした頃に攻撃し、信長は落命した。卯刻前とあるのは夜明け前、辰の刻前とあるのは明け方早朝のつもりか。十分明るくなってから戦いが始まったわけではない。信忠は二条御所にて「後刻」、落命した。

秀吉が備中陣にてこの報を得たのはいつか。翌三日とする本が多く、ほとんど定説だが、四日とする史料もある。天正十年つまり同じ年十月十八日に書かれた秀吉書状がある。秀吉の主張を、離反しつつある織田信孝に披露してほしいと、岡本良勝・斉藤利堯（あるいは川田彦右衛門）宛に依頼・要請したものである（同内容の写が複数あり、『大日本史料』十一編二、十月十八日条に所収、三・七七五頁、金井文書・松花堂所蔵古文書集ほか、また浅野家文書は『大日本古文書』一〇頁にもある。後述するように自己アピールで、以下では「披露

状」とする)。それには

六月二日ニ於京都、上様御腹めされ候由、同四日ニ注進御座候

と記され、四日着とあった。いっぽう八年後の回想、天正十八年五月二十日付・浅野長吉・木村常陸介宛秀吉書状（『大日本古文書・浅野家文書』二五）では

六月二日上様御腹をめされ候事、三日の晩ニ、彼の高松表へ相聞候

とあって、四日としたり三日の晩としたりして、二通りの記述がある。のちの『秀吉事記』には「六月三日夜半」とある。谷口克広前掲『検証本能寺の変』は、秀吉にとっては特別の日であるから、暗いうちであったことはまちがいない、三日の晩、四日未明も同じで、ともに正しく、同じ時間帯を指している、としている。ただし前者（披露状）は事件の起きた日から四ヶ月後で、そこそこ近い。そのときには秀吉は飛脚が四日についてと認識していた。そのことが重要ではないか。三日の晩というのは八年後の回想である。以下に本稿は多くの脚色の存在を明らかにするが、この「三日夜半」もそのひとつの可能性がある。情報を知った日は次第に早くなって、『太閤記』では六月三日子之刻、『豊鑑』では六月二日の夜とあるが、あり得ない（八・一四頁）。残された史料のうち、最も早い記録にある四日、おそらく早朝ないし午前が正しいのではないか。

飛脚の速度

JR 京都駅・備中高松駅間の距離は 230, 3km であるから、京都と備中高松城の距離もそれくらいであろう。多くの記録を見ると、中世の継飛脚（次飛脚）は一日 100 キロを移動したと考える事例が多数である。歩く速度が一時間 4 キロで、これを交代交代で引き継いでゆけば、24 時間で 96 キロになるから、ほとんどむりがない伝達方法だった。京都と博多の距離を 660 キロとすると、七日かかることになる。実際、七日前後の事例が多い（服部『蒙古襲来』111-113 頁）。

ただし青木和夫「飛脚の速度」（『日本律令国家論攷』、一九九二）は古代にはもっと早いとしている。平城京と大宰府間（670 キロ）は、発つ時刻が早ければ、四日四晩、遅くとも五日四晩で連絡し得たとしている。

青木が挙げたのは、天平十二年（七四〇）藤原広嗣の乱の発端と終結記事、

および宝亀九年（七七八）十月の遣唐使船帰着の事例である。広嗣上奏文に記された日付が、兵を起こした日と同じとしている。しかしながら『小右記』の記載からわかる刀伊入寇時には、九日を要しており、比較すれば広嗣の事例は早すぎるから、異なる解釈（広嗣が兵を集めた日と、上奏文の日付が別の可能性）がありうるかもしれない。

また飛駅の規定に合わせて、解など上奏文の日付を操作する例もあったのではないか。古代に九州西端海岸におかれていた警固所から大宰府への解文には、到着・発信の時刻が記されていて、深夜であっても飛駅の厳密な規定を遵守した様子うかがえるが、反面、日時の操作も行われやすかったことが考えられる（服部「日宋貿易の実態」『東アジアと日本・交流と変容』三七頁～）。

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/anywhere.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/17776/p33-64.pdf>

よって古代が中世よりも、つねに早かったとは考えない。馬を使う場合について、青木は騎兵隊であった末永雅雄の談話（直木孝次郎『壬申の乱』に引用）に言及している。馬を使用した場合は早くなることはそのとおり。ただし青木が引用した例は、騎兵自身が移動する場合であって、騎兵も馬も一昼夜、不眠不休となる限定的な用兵である。また一昼夜 160 キロの踏破が可能というけれど、平均時速は 6,6 キロとなるから、大半は並足、馬にとってはもつともゆっくりな行軍であった。飛脚通信は書状（箱）のみが移動し、人も馬も交代する。馬の並足は時速 6,6 キロで人間よりは一、五倍を行く。継ぎ馬（交替の馬）を使えば並足だけでも、たしかに 160 キロ以上を行けた。

* 末永の発言を以下に引用しておく。旧日本陸軍の騎兵の標準歩速は、一分に付き、並足＝110 メートル、速歩＝210 メートル、伸長速歩＝310 メートル、駆足＝420 メートル、襲歩＝800 メートル以上。急ぐときは速歩 10 分―常歩 5 分―伸長速歩 10 分―常歩 5 分、というように緩急を交互に交え、1 時間に 10 キロを行く。さして難事ではなく、末永氏自身、山道をも入れて一昼夜に 40 里（160 キロ）を踏破した経験を持つ、とのことであった。

理論上考えうる最も早い通信は、足の速い人間を揃えてのリレーではなかろうか。箱根駅伝は 1 チームの選手 10 人が往路 108（復路 109）キロを 5 時間 35 分で走る。もし選手を 40 人配置すれば 24 時間で 400 キロを進みうるようになって、時速 16～20 キロである。馬（時速 6,6 キロ）よりもはるかに遠くまで行く。

博多・京都間の通信（660 キロメートル）でも1日半で、京都・鎌倉間470 キロメートルも1日とわずかで、書状は届く。しかしこのような速すぎる記録はひとつも残されていない。川や海もあるから船を使う分は遅くなるし、夜間は猛スピードで走ることはできない。費用対効果の問題もあろう。走らずとも、馬も使わなくとも、人が歩くスピードでかまわないとしていた時代が多かったように感じる。

京都から高松まで、鉄道換算で232,7km。備中高松城攻め時には臨戦体制であるから、前線基地と京都・安土間には当然整備された飛脚・継馬が置かれていた。二日の午後に出たならば、通常の数よりいくぶん早い時速5キロで引き継ぎ（通信）して行けば、一日目（二日）、朝9時に出たとして75キロ、二日目（三日）が120キロ、三日目（四日）が朝8時までで40キロとなって、朝には到着可能である。四日朝までに飛脚は問題なく着いた。

『豊臣秀吉譜』に

「同月三日、長谷川宗仁馳使於秀吉曰(略)」

とある。長谷川宗仁は織田信長に仕え、天正五年に従五位下、法眼を叙し刑部卿と称した（寛政重修諸家譜、『大日本史料』慶長十一年二月九日条）。信長側近であったから、信長専用の中国への飛脚便（軍用通信）を使用することができた。後世の記述になる『池田氏家譜集成』（三〇頁）にも、『明良洪範続編』にも、長谷川宗仁（宗任）方より注進が出たとあって、後者では「二日ノ午刻ニ京都ヨリ出飛脚、同三日ノ刻秀吉公ノ陣所ニ到着ス」とあるけれど、到着の時刻は早すぎる。秀吉への飛脚が驚くほど早かったとは思われず、通常の臨戦態勢下の軍事通信システムが機能したと考える。

毛利方の通信経路

毛利氏が本能寺の変を知った経緯については、『吉川家文書』中納言（毛利輝元）様え申上候条数之案・慶長五年九月十五日条（六七頁）に

折節従紀州雑賀、信長不慮之段、慥ニ申越候

とあり、雑賀衆からの連絡があったとされている。雑賀衆の内、反信長方であ

った人物と、毛利氏との間の通信路があったようだ。秀吉陣を避けて迂回するから船飛脚か。明智光秀は事前に雑賀に通じてはいなかっただろうから、この通信経路は使用不可能である。

毛利方が本能寺の変を知った時期は、六月六日以前である。つまり、この日付で信長の死を伝える毛利方書状が二通残されている。小早川隆景が桂左太・岡宗左(宗<惣>左衛門＝元良)に宛てた書状(『萩藩閥閥録』八〇・岡吉左衛門)、および毛利輝元が満願寺人々に宛てた書状『毛利氏四代実録考証論断』二二、ともに六一頁)である。信長父子三人が死亡、三七(織田信孝)も大坂で生涯(死亡)したとか、討ち果たしたのは七兵衛尉、明智、柴田であるとされていて、はなはだ混乱した内容ではあるが、信長死去の情報は伝わっていた(七兵衛尉は信澄。信長弟信勝<信行>嫡子で、明智光秀女婿であった。本能寺の変の直後に織田信孝・丹羽長秀によって殺されている。『大日本史料』六月五日条)。

なお光秀が毛利方に使者を送ったことも当然に想定される。信長の継飛脚(次飛脚)の先端は秀吉に通じているから使えない。民間の町飛脚も使えないから、専使の派遣になった。「使送」であって、使者本人が行くから、休憩や睡眠時間が必要で、秀吉への連絡に較べれば、相当に遅くならざるを得なかった。

のちには創作と思われる諸説ができる。『毛利家日記』一(三五頁)には、

輝元エハ 尼子浪人原平内、其比明智所ニ有之(中略)、此使飛脚海上風烈シテ、摂州御影ヨリ歩立シテ延引ス、其後徒諸方告来ル

とある。明智光秀が派遣した原平内は、海上路が使えず、御影から陸路になったため、遅れたとしている。JR住吉駅から足守駅まで185.2kmあるから、徒歩なら不眠不休で46時間かかる。眠ればそれ以上かかる。海路を入れて四日か。じっさいには述べたように六日以前に、別ルートから情報を得ていた。

情報戦

羽柴秀吉は情報を知った翌日に、摂津茨木城主の中川清秀に宛てて書状を出している(「梅林寺文書」六月五日秀吉書状、二八一頁)。中川の書状を読んだ上での返事であるから、中川もまたこの次飛脚を利用して、秀吉に事態を知らせ、意見を求めたようだ。この文書が現存しているように、返信もまた無事上方に届いた。次飛脚(軍事通信)は機能しており、往復が可能だった。光秀

方は秀吉の元にしか通じない飛脚を接收することに失敗していた。

清秀宛の書状には以下のようにあった。

今、京より罷下候者、慥申候、上様（信長）并殿様（信忠）、何も無御別儀、御きりぬけなされ候、せゝ（膳所）か崎へ、御のきなされ候内ニ、福平三（福富平左衛門）三度つきあい、無比類動（働き）候て、無何事之由、先以目出度存候

秀吉は次のように中川清秀にいった。

「いま京から戻ってきた者がはっきりと言った。信長様も信忠様もご無事、脱出して膳所城にいる」（福富平左衛門はじっさいには二条御所にて戦死しているけれど、かれの助けで逃げた、ともいつている）。

秀吉に入った情報は、おそらく信長の死そのものであるうけれど、外部にはこのように説明した。情報操作ともいえるが、半ばは秀吉の願望でもあった。明智光秀は信長の遺体を発見できなかったとされるから、生きているという風評が、あっておかしくはない。とすると、秀吉が和睦相手の毛利方に対しても、同様に説明した可能性が大である。前掲・満願寺宛の毛利輝元書状（六一頁、のちに引用）から、毛利方が信長の死を知った上で、和睦に臨んだことが明らかである。秀吉は、信長がまちがいなく生きているから、至急救援に行く。そう毛利側に説明したと考える。毛利方とてそれを否定できる絶対的な材料はまだ持っていない。

六月四日巳の刻（午前9時～11時）に、備中高松城主清水宗治、そして兄月清、末近信賀ほか家来四名が乗船し、いずれも切腹した（『萩藩閥閥録』三五・清水宮内、四六頁・四九頁・八九頁～）。このうち末近は小早川隆景が加勢として城内に入れた人物だった。秀吉は

六日迄致逗留、終城主事者不及申、悉刎首候事（浅野文書、二頁）

「六日まで逗留して、ついに城主（清水宗治）はむろんのこと、ことごとく（七名の）首をはねた」、そう吹聴した。しかしほんとうに六日まで高松滞在であったのか、どうかは次章で述べよう。

なお明智光秀が派遣した飛脚を、秀吉忍びの者が庭瀬で捕らえたと、前掲『池

田氏家譜集成』(三〇頁)や『常山紀談』(八八頁)は記述するが、これも史実とするには問題がある。庭瀬を通行したのなら、光秀使者はもっとも警備の厳しい山陽道を行ったのだろうか。『川角太閤記』(一七頁)となると、陣場にて夜回りの者が怪しい人物を捕らえたところ、文箱を持っていた。なかにあった小早川隆景に宛てた光秀書状を読んだ秀吉は、そこで初めて信長の死を知って、光秀使者を切り捨てたとしている。読み物・語り物としてはうまくできてはいる。だが創作であろう。

2 高松城から沼城を経て姫路へ

不自然な通説

高松開城を受けて、「中国(備中)大返し」が開始される。秀吉披露状・「浅野家文書」の記述のなかに

「同(六月)七日ニ廿七里之所を一日一夜ニ姫路へ打入」

と明記されている。「一日一夜」は「一昼夜」と同じ意味だから、二十四時間の行軍となる。JR備中高松駅と姫路駅の間は99,6キロ、廿七里(108キロ)とあったのはこの距離をさすものだろう。

この意表を突く敏速な行動から、高松城から姫路城を経由して山崎に布陣するまでの行軍が、常人ではなしえない「中国大返し」の奇跡として、語り伝えられるようになった。ほか尼崎への行軍についても「夜昼なしに」と表現している。

あまりにふしぎな話しだ。とくに前半、姫路まで。大軍が二十七里をわずかに一昼夜で進軍することは、通常はありえない。近代軍隊は一里を50分で歩き、10分の休憩を取って再度行軍し、それをくり返したが、8時間が限界であろう。夜一睡もせずに行軍することも、なくはないかもしれないが、決戦場にはほど遠い、この山陽路(備前・播磨)での行軍において、そこまでのムリを強いる必要がどこにあったのだろうか。

高松と山崎は述べたように鉄道換算で232,7km。つまり五十八里である。二十七里といえばその半分近い(備中高松駅と姫路駅の間は99,6キロ。京都から高松まで232,7kmだったから、姫路は中間点よりわずかに西に位置する)。全九日の行程で、前半半分、中間地点までをたった一日で行けたのなら、二日か三日で山崎までも行けたことになる。まったくありえない話しで、何らの合理性も

なく、奇異な印象しか残らない。疑うのがふつうではないか。

そこでまず高松城開城後の動きを確認する。上記の「浅野文書」(二頁)に

明智退陣之儀は安御座候と存切、六日迄致逗留、終城主事者不及申、悉刎首候事

とあったことはみた。六日まで高松陣にいたとする史料はほかにも多く、「秀吉事記」(二八四頁)に

六月六日未刻、引備中表、至備前国沼城、七日大雨疾風、凌数カ所大河洪水、至姫路、廿里許、其日著陣

とある。ところが大返しの最中に書かれた一次史料、リアルタイム史料である書状が二点あるのだが、そこにはそのような記述がなく、異なる日が記されていた。

五日には備前・野殿に在陣

まずは先にも引用した『梅林寺文書』の六月五日付、秀吉の花押がある正真正銘の秀吉書状で、宛先は中川清秀だった(二八一頁)。その袖書き(追申を書く文、追而書)に

尚々、の殿(野殿)迄打入候之處、御状披見申候、今日成次第、ぬま迄通申候、古左(古田左助重然)へも同然候

とある。野殿は岡山市北区野殿、笹ヶ瀬川の左岸、JR大安寺駅に近く、山陽道がここを通過していた。高松陣からは二里弱、徒歩二時間ほどの行程である(JR備中高松・大安寺間の距離は7,7キロ)。「成次第」で、つまりなりゆき次第で沼城(さらに15キロ先)まで行くといっている。

* JR備中高松駅→上道駅では21,7km、上道駅から沼城まで1kmとして22,7km、沼城から姫路は76,9キロとなる。

すでに備前沼城まできているのなら、京上もそれほど日数はかかるまい。受け取った中川清秀はそう判断するだろう。秀吉の味方となる選択を確実にしておかねばならない。

高松退陣の背景

つまり秀吉は五日には高松陣を去っていたと考える。六日までの高松在陣は疑わしくなる。

『武家事紀』（六九頁）に

高松城ニハ杉原七郎左衛門家次ヲ入置キ毛利家和睦相調テ

とあって、和睦成立後、城代に杉原家次が入城した。

なお披露状(三頁)に「毛利一書并血判人質兩人迄請取」とあって、秀吉陣は毛利陣から人質を取ったとしている(ほかにも(天正十年)九月廿日下国愛季宛て秀吉書状、『豊臣秀吉文書集』一の四九一に「人質兩人迄召置令和睦」)。秀吉方は森(毛利)重政・高政兄弟が、毛利方は藤四郎秀包(元総)、桂民部大輔が人質となったとされている(『池田家家譜集成』三一頁、『豊後佐伯毛利家譜』三二頁)。しかしこの話しには翌年七月から始まる、秀吉・毛利との講和での条件との混乱もある。人質たる毛利方二名が上洛したのは、翌年冬になってのことだった(『大日本史料』天正十一年十一月一日条)。また秀吉方にせよ、毛利方にせよ、戦時のさなかに、要求された人質を直ちに送ることができたのだろうか。

このとき三ヶ国(美作・伯耆半国・備中半国)が割譲されたとする話しも同様である。備中に関しては河辺川(高梁川)を境界とし、伯耆については矢走川(八橋川)を堺とする提案だったとされている(『菘藩閥閥録』四三頁、「清水長左衛門元周家略系伝書」、九三頁、ほか九〇頁)。しかしこのあとも隆景は河辺川(高梁川)東の幸山城に在陣していた(後述)。

最終的には織田信長政権が裁定することである。中国方面司令官であった秀吉に、境界決定決着の最終権限まで与えられていたのだろうか。人質も領土も一年後の毛利和平にて確定されていく(『大日本史料』天正十一年十二月十五日条ほか)。

和議停戦によって清水宗治の支配域は毛利氏の手から離れて、秀吉（信長）領になる。高松陣では人質・領土割譲、いずれも提案と概ねの了解の段階で、それを含みとして停戦になった。

毛利側の対応

毛利方がなぜ秀吉軍を追跡しなかったのかもよく問われる。先にもふれた毛利輝元が六月六日に認めた満願寺宛の書状(六一頁)に答えがある。

(前略、信長父子の死を大慶と記す) 当陣之儀ハ先以惣和談相調候、羽柴引退候、此方之儀者、中途迄帰陣候、尚吉事重疊可申承候

秀吉の攻勢の前に、冠山城、河屋が城（溝江文書・五月十九日秀吉書状、『豊臣秀吉文書集』一の四一九、「高松城攻之物語」八四頁）と、次々に城を落とされていた毛利方には、安堵の気持ちがあつた。そのことが、よくわかる文面ではないか。

さらに『大日本史料』には未収録の寄組村上文書（『山口県史・史料編』中世三・五三六頁所収）中の（天正十年）六月八日輝元書状もあつて、

将又此表之事、羽柴和平之儀申之間、令同心無事候、先以互引退候、然処信長父子三人事、於京都生害之由、其聞候、不慮吉事此事候

とある。規定の方針通りで、毛利家中もまた、方針を切り替える余裕はなかつた。

高松攻めは五月八日に始まつた（前掲・溝江文書、『史料綜覧』は「吉川家譜」に依拠して七日からとする）。毛利輝元は備中猿懸城（矢掛町、鉄道計算で24キロ）まで、隆景・元春は備中岩崎（岡山市北区新庄・庚申山）まで出陣していた（毛利家文書、三七頁、隆景は南方日差山に布陣という）。岩崎は高松城と足守川を挟んで1キロもないほどの至近距離であつたが、救援はできなかつた（高松城の籠城を小早川隆景は「数日籠城」といつている。天正十年六月十三日書状、『黄薇古簡集』、五三頁）。六日の段階で小早川隆景は

先、幸山・河邊迄打入候

といている（『萩藩閥閥録』六月六日隆景書状、六〇頁、関連して「略系伝書」九四頁）。対陣中に岩崎・日差山にいたのならば、隆景は二日後には6キロほど西方の幸山城、あるいは高梁川（河邊川）を渡って西岸にまで移動（退却）していた（関連史料は九四頁）。

陣を引くにあたり、毛利家紋の旗を秀吉が借用して、毛利方の参戦を装ったという話は『黒田家譜』（六九頁）にも、『池田家家譜集成』（三一頁）にも見えている。黒田如水は終始同行、池田信輝（恒興）、元助（之助）も山崎の参戦者である。ありえない話なのか、あるいはありえた話なのか、いずれだったのかは微妙であろう（後者が鉄砲・弓まで毛利方より借りたとするのは疑わしい）。毛利方には秀吉後方を追跡する気持ちはなかった、とみたい。

秀吉の判断・ただちに先遣隊

城代となった杉原家次は入城し、修復を開始し、守備兵とともに警戒に当たただろう。秀吉軍の数については秀吉自身が「二・三万にて取巻候」（披露状）といている。こうした記述での兵の数は、あまりあてにならないが、相手が織田信孝だから、多めではあっても極端にちがう数字ではない。2万人ほどか。

秀吉軍は包囲の必要がなくなった段階で、先遣隊（先駆、先懸衆）を編成して姫路への行軍を命じたと考える。ここでは仮に高松城に千人程度を残し、残りは暫時東に向かったとしてみよう。2万人の行軍だから小都市の移動に同じである。行軍は同時・単線にはならない。分散して水陸を行き、陸路も複線を行く。途中の宿泊・食事を考慮し、集中を避ける必要があった。2万人がすべて沼城に入るとはそもそも不可能である。また路線全体を警備し、秀吉一行の安全を確保する任務もあった。これら事前の段取りは先触れ隊（先遣隊）が手配をしていった。

小荷駄隊（輜重兵、輸送部隊）は極力海路を選ぼうとしたであろう。急ぐから潮汐が東流する時間帯のみ海路をとって睡眠、西流（逆流）時間帯にはふたたび陸路を行ったことも想定される。

参考までに天正10年6月6日、ユリウス暦1582年6月25日の潮流推算（海上保安庁）をみると、深夜2時から朝方7時まで、および夕方4時から夜8時までが東流となっている。

備前・野殿で待機の意味

こうしたことを考えると、心に京のことしかない秀吉が、はやくも五日に野殿までできていたことは、至極当然で妥当なものである。一日も早く姫路に入りたいが、敵情もある。前掲下国愛季宛書状に「同五日迄対陣仕」とある。この朝に高松を出て、山陽道の野殿にてしばしの間、様子を窺った。野殿までくれば境目川を越えており、すでに備前（宇喜多領）であった。敵地であった備中とは大ちがいだから、ここにて敵情視察・情報収集をした。なにごともなければ、一気に沼城に入るといふ秀吉のことばには不自然な点はない。よってこの、野殿において書かれた秀吉書状によって、通説がこれまでいってきた、六日まで高松に滞陣していたなる説のあやまりが証明される。「今日、成次第」（なりゆきで）とあった。心配した変事は起きなかったから、五日夕刻には沼城に入ったと判断したい。では姫路への行軍はいつなのか。

六日には姫路着：どう解釈するか

そこでもう一点のリアルタイム史料を見る。「松井家譜」収録の六月八日松井猪助宛て、杉若無心書状（二八三頁）で、

西国表之儀、存分之まゝ、両川人質定ふに（丈夫に）相定、三ヶ国被相渡、去六日ニ至姫路、秀吉馬被納候

とある。これによれば、すでに六日には姫路に着いていた。『大日本史料』はこの史料によって、六日条に「秀吉、姫路ニ還ル」と綱文（見出し）をたてている。藤井讓治・前掲『居所集成』五二頁をみると【概要】は七日に姫路着とするものの、下段の【詳細】ではこの史料に依拠して六日姫路着とし、後掲史料によって七日説も紹介する。

差出人の杉藤七無心とは杉若無心のことで、文面から中国陣に参加していたとわかる。天正十年六月日に丹波国氷上郡妙法寺に宛てた、彼と桑山重勝とが連署した禁制がある（『兵庫県史』史料・中世編3）。山崎合戦での勝利以後に、光秀領地だった丹波の管轄に当たった人物で、秀吉配下である。宛先の松

井猪助（胃助）は康之のことで、むろん光秀に与しなかった細川幽齋の家臣である。

「両川（吉川・小早川）から人質も取った、三ヶ国を放棄させた。六日には秀吉は姫路に馬を入れた」、と述べている。

手紙の相手の松井・細川は有力な味方となる公算が大で、かれらは秀吉の一日でも早い畿内到着を待望していた。「われらは迅速に動いている。すでに六日には秀吉が姫路に着いた」、そういわねばならない。しかし五日に野殿にいて、翌日に姫路に入ることは、物理的にむずかしいだろう。

*人質、三ヶ国が決定ではなく、原案の提示であろうことは既述した。

廿七里・一日一夜の文脈

いっぽう秀吉が「同七日、廿七里之所を一日一夜に姫路へ打入」と述べていたのは、同年十月、四ヶ月後のもので、信孝への披露を依頼した状、先から引用してきた披露状（ピーアール）のなかで、であった。

一 （中略）同七日、廿七里之所を一日一夜に姫路へ打入、
一 人馬をも相休（あいやすめ）、切上（きりあげ＝きりをつける、一段落する）可申、と存候處、信孝様大坂ニ御座候を、明智め、河内へ令乱入、はや大坂を取巻、御腹をめさすへきの由、八日之酉刻ニ、風之便ニ御注進候之間、若（もし）信孝御腹を被召候てハ、何かも不入（要らざる、無益な）儀と存、夜昼なしに、十一日之辰之刻ニ、尼崎迄令著陣（着陣）、人数不相揃討死仕而も、川（淀川）を越、致後巻、可申ニ相定候事

「七日に明智を討つため、廿七里を一昼夜で駆け抜けた。さすがに疲労困憊、人馬を休め、一区切りをつけるつもりであったが、大坂にて信孝さまが明智に包囲され、腹を召せと迫られている、と八日酉の刻（夕方六時前後）に聞いた。それは一大事、腹を召させてはならないと、夜昼なしに駆け、十一日に尼崎に着陣した」、と続く。「全てあなた様のためですぞ」。

六日先遣隊、七日に秀吉が姫路入城

七日に姫路に入城したことは、前掲下国愛季宛秀吉書状にも

同七日ニ播州姫路之城へ打入

とあった。これらの史料では入城の日が一日ずれているようにみえるが、じっさいは両立しうるものと考ええる。六日着も七日着も、秀吉軍二万の動きからすれば、ともに正しいのである。

秀吉は、四日早朝、本能寺の変を知ると同時に、次の策を考えていた。清水宗治切腹は検使の堀尾茂助（『萩藩閥閥録』四六～四七頁、高柳光寿は杉原家次説だが、錯誤か）に任せればよい。決定済みで、スケジュールどおりの切腹の進行には、もはや秀吉には関心がなかった。先遣隊に指示し出発させる。先遣隊は四・五・六と三日をかけ、六日のうちに姫路城に入った。途中にも兵を配置した。一日九里、九時間行程だからムリのない行軍だった。進路（退却路）となる備中路・備前路の警備も先遣隊の役目であろう。秀吉自身は要所にて護衛される中、少数の騎馬隊で行進することができる。騎馬のみであれば六・七時間ほどの行程だった。五日には野殿での休息と偵察の後、宇喜多氏配下の沼城に入城した（『秀吉事記』に沼城記事のあることはすでに紹介した）。沼城から姫路は76,9キロ（鉄道換算）だから、六日・七日と二日をかけて姫路まで二十里（厳密には一九里に近い）を行軍したのであろう。

岡山・姫路の間は赤穂近辺である。のちの『備前軍記』に「沼を立て（発て）、播州宇根に著ありて、姫路へ帰陣也」とある（二九六頁）。千種川を前にして、宇根＝有年に宿泊した可能性もある。六日に「秀吉馬被納候」とあるのは、「ことばのあや」である。

松井康之を安心させるため、六日といわなければならなかったし、十月段階になって、反抗的になりつつあった織田信孝には、あなた様をお助けするために、わずか一昼夜で駆抜けて、七日に姫路に着いたと、恩に着せねばならなかった。信孝は秀吉よりも二〇歳ほど年少で、山崎合戦では一応総大将になったが、清洲会議以降は秀吉に不満を持ち、柴田勝家に接近していた。信孝と周囲に対しては、すべてを正直に話す必要はなかった（なお信孝は賤ヶ岳合戦後に秀吉によって自害させられる）。

行軍は一日九里（9時間）までで、この速度に規制された。騎馬も従者がいればこの速度になる。先遣隊も秀吉本人もこのペースに従った。つまり

*先遣隊・六月四日清水宗治切腹の日のうちに高松出発□六日姫路着。途中分散して道中警護。

*秀吉 ・六月五日高松発 備中・備前の国境を越えた野殿で待機、そのあと沼城へ□六日宇根周辺泊（推定）□七日姫路入城となる。

秀吉は敏速だった。改めてその適確な判断力におどろく。しかもけっしてムリな行動はとっていない。のちになって、離反しつつある織田信孝に、自分がいかに信孝のために献身的な行動をしたかをアピールする文章を作成した。信孝自身の説得は困難でも、周囲を納得させ、味方につける必要があった。情報戦には、ほらを吹くことも必要だった。「中国大返し」とされる仰天イメージの核心は、秀吉その人が作り上げた虚構である。しかし後の史書はこれを引き、孫引きした。『秀吉事記』（二八四頁）には「大雨疾風、大河洪水」のなかをいったとあるけれど、創作だとしか思われぬ。行動中、終始甲冑をきていたかの如く考える人もいるようだが、盛夏であるから、敵がいなければ甲冑も小荷駄に運搬させ、軽装で行った可能性もかなりある。秀吉が先頭に立ったかのような記述が多いが、それも有り得ない。

*『本能寺之變・山崎之戦』の著者である高柳光寿は、あとがきによれば『大日本史料』十一編一の編纂主任であった。かれは『梅林寺文書』について、「沼までの到着は、清秀を味方にするために偽りを報じたもので、信用できない」として、切り捨てている。二十里を一日で行くことの不自然さにはまったく言及がなかった（九八～九九頁）。

3 結論

羽柴秀吉は備中高松城から本城姫路城まで迅速に引き返したが、三日をかけたの、騎乗では一日六・七時間ほどの行程であった。その二十七里をわずか一昼夜で駆け抜けることなどありえなかった。沼城からの二十里でも一昼夜ではむずかしいし、そうしなければならぬ必然性がない。しかし反抗的な織田信孝に、自分がどれほど忠節を尽くしたか、献身的であったかを説き、周囲にも認めさせるために、そう表現した。「おおぼら」なのだから、史実と認める必要はない。

前掲下国愛季宛書状には姫路入城記事のあとに「同九日より京都へ切上」とあり（『豊鑑』も同日、三六二頁）、荻野由之氏所蔵文書によれば、その日九日には大明石に至った（六月十一日秀吉書状・三六二頁）。十一日には尼崎に着い

た（浅野文書、三頁）。十二日には摂津にいた（蓮成院記録、三六二頁）。

姫路から山崎までは鉄道換算で 116,6 キロ、この間五日だから一日 23 キロ、平均六時間以下の行程で、問題はなかった。小荷駄も随行できた。

これまで大半の歴史家は、秀吉自身が発した「二十七里を一日一夜」なることばを額面どおりに受け止め、不自然さを感じなかった。沼城にいたことには気づいていたから、「一日半」と微修正はされたが、そこまでである。秀吉の言葉に依拠して後世の記録は綴られ、みながそれを信じて、備中高松城を六月六日に出発したものとしてきた。六日出発は世紀に亘る不動の定説であった（最近ではNHK：BS 歴史館秀吉・天下取りへの必勝戦略 奇跡の”中国大返し”の謎 2013年09月29日放映）。

<http://ameblo.jp/e-fh/entry-11620777741.html>

けれどそれは一次史料を無視した結果である。行軍中の秀吉本人が五日にはすでに移動中であると記したことに留意しなかった。六日に姫路に着いたという別の一次史料もあった。二万の軍勢の移動であれば、到着日が複数になることも当然であった。史料操作の基本は一次史料（リアルタイムの秀吉書状）の優先である。でなければ史実は明らかにならない。そのリアルタイム史料は二点ともに『大日本史料』に収録されており、九〇年前に正しく史料操作されていれば、歴史像は復原できていたのである。

秀吉の行動で卓越していることは、信長の変事を聞いた段階で、ただちに東上する手配をしたことである。三日を要する姫路までの行程で、早くも六日に先遣隊が姫路に入城していた。これは賞賛に値する。

秀吉は情報を操る名手でもあった。だが歴史学に従事する科学者までが、操られてはならない。不自然な事象は、史料の解釈を必ずどこかで誤っている、というのが筆者の信念である。

* 脱稿後、関連論考に高松開城を水運から論じた光成準治「高松城水攻め前夜の攻防と城郭・港」（『倉敷の歴史』一八・二〇〇八）、および毛利輝元が本能寺の変をいつ知ったのかを論じた広島城企画展示図録『輝元の分岐点』を知った。

Thoughts on “Chugoku Ogaeshi (Bicchu Ogaeshi)” of the Boaster Hideyoshi

HATTORI Hideo

Contents

Introduction

- 1 Conveyance of information on “Honno-ji no Hen” (Honno-ji Incident, 1582)
- 2 A march from Takamatsu-jo Castle to Himeji-jo Castle through Numa-jo Castle
- 3 Conclusions

Keywords

AKECHI Mitsuhide, ODA Nobutaka, Hikyaku (express messengers), Bicchu Province, Takamatsu-jo Castle, Bizen Province, the Sanyodo Road, Nodono District (in Okayama), Numa-jo Castle, Himeji-jo Castle, Yamazaki district (in Osaka), Hideyoshi's letter

The Main Point of Argument

HASHIBA Hideyoshi (later TOYOTOMI Hideyoshi), who was fighting at Takamatsu-jo Castle in Bicchu Province, heard the news of the Honno-ji Incident two days later that AKECHI Mitsuhide rebelled and killed his lord ODA Nobunaga at the Honno-ji temple. Hideyoshi immediately entered the cease-fire negotiations and concluded a peace with the Mori clan and headed for Kyoto by way of Sanyodo Road (Chugoku-suji Road) to fight a showdown with Mitsuhide. That is, so called, “Chugoku Ogaeshi (Bicchu Ogaeshi)”, a great rush-back from Chugoku (Bicchu Province).

Hideyoshi himself wrote about the return that he ran “27-ri (about 108 kilometers) round the clock.” Takamatsu-jo Castle was 58-ri (232 kilometers) away from the Yamazaki district in Settu-no-kuni(Osaka-Hu), where the showdown took place. Although it took nine days for Hideyoshi to travel that distance, yet he said he ran half of that distance, from Takamatsu-jo Castle to Himeji-jo Castle, in a whole day and night. That is absolutely impossible. His words, however, were believed and “Chugoku Ogaeshi (Bicchu Ogaeshi)” has been said to be nearly divine work. He also wrote that he was able to enter Himeji-jo Castle on June 7th after leaving Takamatsu-jo Castle in

Bicchu Province at around two o'clock on June 6th. When ODA Nobutaka (Nobunaga's third son) and his vassals later became hostile toward Hideyoshi, he tried to explain "how he hurried night and day to rescue Nobutaka in crisis in Osaka." His remark was made in this context. I think that was an almost tall story, exaggeration rather than the fact.

According to Hideyoshi's letter (in the Bairinji Letters) written on June 5th, on a real-time basis, while he was on the march, he left Takamatsu-jo Castle in Bicchu Province and came to the Nodono district in Buzen Province (Sanyodo Road) on that day. He wrote he would go to Numa-jo Castle if everything was going all right with the surrendered Mori clan. The truth is that he came to Bizen Province on 5th, leaving Takamatsu-jo Castle in Bicchu Province on the same day and entered Himeji-jo Castle on 7th after marching for three days. SUGIWAKA Mushin's letter written on June 8th, also on a real-time basis, tells us that advance troops left Bicchu on 4th and entered Himeji-jo Castle on 6th. Hideyoshi's remark was inconsistent with these two letters and it was physically impossible to leave Takamatsu-jo Castle on 6th and enter Himeji-jo Castle on 7th. Based on these facts, I concluded Hideyoshi told a falsehood.